

花き日記 第6回 枝物（高知県）

物語を持つ枝物

国内最大級の花き卸売市場が選出する「フラワー・オブ・ザ・イヤーOTA2025」でJA高知県七立栗生産組合の枝物「七立栗（ななたてぐり）」が最優秀賞を受賞しました。

「七立栗」は、高知県黒潮町馬荷の山中にのみ自生する在来種の栗です。一枝に10～30個ほどの小ぶりのイガが連なり、下の実から順に熟し、上の実まで約7回にわたって収穫できることから「七立栗」と呼ばれています。

今回は、受賞した「七立栗」や近年の枝物需要についてご紹介します。



七立栗（ななたてぐり）
（出荷時期：8月下旬～10月）

“ローカル”×“トレンド”の成功モデル

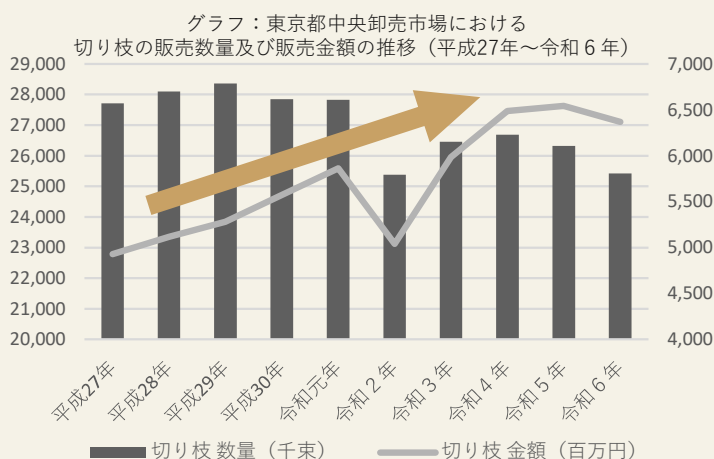
「約1200年前、山中で道に迷った弘法大師を心優しい夫婦がもてなし、その後裏山一帯に実のよくなる栗の木が繁った」という伝承から、地元では「大師栗」とも呼ばれ、信仰・民話と結びついた在来樹として親しまれてきました。1994年、地元有志で「七立栗保存会」が設立され、食用栗としての保存活動を開始。2008年からは切り枝として出荷を始め、生産技術の向上や県外市場への出荷等、地域資源を商品として磨き上げてきました。

現在では安定した品質の高さや他の商材が持ち合わせない異素材感から、市場での注目を高めています。「七立栗」は、地域発のオリジナル素材（ローカル）を「物語を持った枝物」として、花き市場・フラワーデザインの嗜好（トレンド）にうまくマッチさせた成功モデルとして、今後の展開が注目されます。

フラワー・オブ・ザ・イヤーOTA2025とは

国内最大級の花き卸売会社の株式会社大田花きが年間を通じて流通する約7万点（国産・輸入）の花きの中から、品質や流通量、仕入れのしやすさ、デザイン、トレンドへの適合性等の「市場で評価される花」を多角的・総合的に判断し、統計分析及び大手バイヤーによる投票により選出し表彰している賞。2005年に創設され、今年で21回目を迎えました。

株式会社大田花き
花の生活研究所



（出典：東京都中央卸売市場統計情報）

コラム

～市場における枝物の推移～

東京都中央卸売市場における直近10年間の切り枝の市場推移をみると、販売数量は減少しているものの、販売金額の高まりがみてとれ、切り枝需要の高まりが推測されます。

中国四国管内の愛媛県では、ユーカリ等の洋木系の枝物類の需要増加を捉え、県東予及び中予地域を中心に産地拡大をしています。愛媛県産の高品質な枝物は、市場でも高く評価されているとのことです。